

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

とあるおっさんの VRMMO活動記



椎名ほわほわ
Shiina Howahowa

32



マグマの部屋

足を踏み入ると、部屋の中央から
マグマが急に噴き出す。
番人であるマグマゴーレムを倒すには、
ちょっとした工夫が必要らしい。



500階の試練

不機嫌そうなキツネ耳の女性が待つ。
その実力と好戦的な性格に
アースもたじたじ……？



アース

本編の主人公。
マイペースなプレイぶりで
知る人ぞ知る存在に。
リアルでは38歳独身の
会社員、田中大地。



案内役

塔の内部にて
プレイヤーを導く存在。
水のようなもので
人を摸っている。



カザミネ

氷の魔大太刀を操る
『ブルーカラー』の
凄腕アタッカー。



ツヴァイ

有力ギルド
『ブルーカラー』のリーダー。
炎の魔剣持ち。

VRMMOゲーム「ワンモア・フリーライフ・オンライン」のサービス終了が発表された後、アースこと自分は最後のイベントの舞台となる塔へ足を踏み入れ、試練の日々を過ごしている。

予想外の乱入がありつつも、色とりどりの騎士との戦いをなんとか終えた翌日。

ログインして再び案内役の男と対面する。

「来たか。しかしだな……もつと休んでも良いのではないか？ 先日の戦いを見せてもらったが……あのような事態が引き起こされた事には驚きと憤りを感じたよ。試練はあくまでやってきた者達を押し量る場。何が何でも先に進ませないという目的はない。だというのに、あのような試練のルールを破る輩が現れるとはな。余計な負担をかけられたのだ、あともう少し休息を取っても良いと思うが」

「乱入した黒い騎士の事を言っているのだろう。だが、大した問題はない。気力も十分だからね。大丈夫ですよ、休息は取れていますし気力も充実しています。今日も援軍を頼んでいるところに

飛ばしてください」

彼は自分の顔を覗き込むようにして見ていたが……やがて頷いた。

「顔色は良い、無理をしていないのは確かなようだ。では、今日も頑張ってほしい。今日の舞台は……ふむ、戦いがメインではなく、素早い探索と罠の見切りを要する場所のようだ。幸運を祈る」

その彼の言葉と共に自分は転送された……

到着した場所は、何とか和風の家っぽい感じのエリアだった。壁も木材（に見えるだけなんだろう）でできており、一定間で提灯がぶら下がっている。提灯の色は赤に青に緑に黄色にと、まあ色とりどりである。

「すみません、あなたが援軍として協力してくださいる方ですか？」

周囲を確認していたら、後ろから声をかけられた。振り返ると、そこには重鎧を着たプレイヤーが三名。軽鎧を着た人が三名の六人パーティがいた。

全員が同じ外見をした兜をかぶっているので顔は一切確認できない。ちなみに、その兜はドラゴンの顔を模していると思われる見た目をしていた。

「ええ、その通りです。今日はよろしくお願いします」

軽く頭を下げると、向こうも頭を下げてきた。さて、まずはルールをしっかりと把握しないと。

- 一…ここは六人が全員バラバラの入り口に入ってゴールを目指す、迷宮系の試練である。
- 二…ただし、一定時間が過ぎると迷宮は崩れ始め、迷宮の崩壊に巻き込まれたらそのプレイヤーはアウト。仲間の奮闘を祈るしなくなる。
- 三…ゴールしたプレイヤーが多ければ多いほど、次の階の迷宮は簡単になり、少ないほど難度が上がる。そして次の階に移ればアウトになったプレイヤーも再び復帰して迷宮に挑戦できるようになる。
- 四…これを五階分繰り返し、五階のゴールに到着できたらこの試練はクリアとなる。

と、大雑把に言えばこのようなルールになっているらしい。だが、もちろんそれプラス色々補足がある訳で……

「ダンジョンには少ないけどモンスターが突如現れる部屋があつて、出会ってしまつてしまうと扉が強制的に閉じられるから倒すしかなくなる。もちろんモンスターと戦っている間も時間は進むから、手早く倒さないと崩壊に捕まってしまう」

なるほどね、そういう部屋もあると。

「あと、罨もある。罨は一〇〇%足止め系で、とらばさみだとか粘着床ねんちやくぶかとかがメイン。最悪だと鳥かごみたいなやつに閉じ込められて、破壊しないと出られない。そうになると、かなりの時間を食わされる事になる。できるだけ怪しい物には触らない方が良い」

罨もその手の嫌がらせ系に特化する事で、とことんこちらに無駄な時間を使わせようとしてくる。なかなか、いや相当に嫌らしいな……」

「そんな感じの嫌がらせに時間を取られて、大半がゴールできずに難度を上げられて、ますますゴールできなくなつての悪循環なんだよねえ。頑張ったんだけどどうしても打破できなくてさ、援軍を呼んだつてわけ」

状況は理解した。確かにこれは助っ人すけびとを呼びたくなる。言っちゃなんだが、彼らは武闘派ぶとうは寄りだ。逆に言うと罨関連への対処にはあまり慣れていないように感じる。たぶんシーフ役がいらないか、いたとしてもまだまだだつて感じなんだろう。

何というか、表現しにくいんだが、シーフ系独特のにおいが彼らからはしないのだ。

「事情は分かりました。しかし、一つだけ分からない事があります。六人がバラバラの入り口に入るんですよね？ 自分が行つたら七つ目の入り口ができるんでしょうか？ それとも、誰かに同行する形になるんでしょうか？」

質問すると、上から一枚の紙が降ってきた。キャッチしてみると、そこにはこう書いてあった。

【援軍の扱い】

一…番外の扱いであり、崩壊に巻き込まれて落下したとしても

ゴールできたとしても難易度に変化を及ぼさない。

二…誰か一人についていく形で迷宮に入ってもらう。誰についていくかはそちらの自由である。

三…迷宮内では《危険察知》の性能が普段の六分の一に制限される。

以上

読み終わった後、同行するパーティにも紙を渡して内容を読んでもらった。彼らの反応は、じゃあ誰につけるか？ というものだった。当然今までのトライでゴールにたどり着けなかった事が多い人につけるべきなんだろうが……

「正直、重鎧組は、ゴール率の低さが大体おんなじなんだよね」

「かといってモンスターも出るから流石さすがに脱ぐわけにはいかんぞ」

「分かつてるつての。しかし、ほんとうしようか？ 援軍は複数呼べないつてのが掲示板でも言われてたし……そもそも援軍要請がここ数日で特に高まつてるから、こうやって来てもらえた今日を逃のがしたら、次はいつになるか分からないよ？」

そんなやり取りが聞こえてくる。しかし、今援軍の扱いってそうなってるの？ ちよっと掲示板を覗いてみるか。向こうの話し合いはまだ終わりそうにないし。

掲示板を閉じる。ふうむ、援軍として採用される人が少ない、しかし需要は多い。なんだか、現実でもよく聞くタイプの話だなあ。

自分はあと少しで終わりなんだが……どうしよう、延長を申請しているんなプレイヤーを手助けした方が良いのかな？ 別に自分は最速登頂なんて狙^{ねら}っていないし、できるだけ多くのプレイヤーが登頂できるようにサポートするのも悪くないかも。

この手伝いが終わったら話を振ってみようか。その返答次第でどうするかを考えよう——つと、向こうの相談も終わったようだな。

「すまない、来てもらったのに長々と待たせてしまった。最初の階は、こいつのサポートをお願いしたい」

「よろしく頼む、俺はゴールした事がないんだ。何とか汚名返上のチャンスを掴^{つか}みたい」

まずは、重鎧を着た彼のサポートからか。アイテムボックスから槍を取り出しているが……うん、長いな。五メートル以上は間違いないある。

「分かりました、ではよろしくお願いします」

自分も、槍を取り出した彼に軽く頭を下げて挨拶をする。その後は各自スタートラインに向かって移動する。

ふむ、各自箱のような物の中に入って少し待つ。すると、少し沈み込んだ後にガチャリという音と共に箱が閉じられる。箱の大きさは、大の大人が二人までなら並んで入れるくらい。

これはたぶんエレベーターになっているな。エレベーターが下に降りていく時に感じる軽い浮遊感がある。やがてその浮遊感もなくなった。

さて、いよいよスタートかな？

と、どこからともなく声が聞こえてきた。これは、カウントダウンか。

ファイブから始まったカウントダウンがゼロを告げると同時に、箱の前面が倒れる形で開いた。目の前に見えるのはレンガっぽい正統派な迷宮の入り口。

「入り口付近に罠はなし、前進に問題なし！」

「罠の有無が分かるのはありがたい！ では急いで前進だ！」

自分と同行者の彼は走り出す。とにかく時間との勝負である以上、移動は駆け足だ。

「分かれ道、どっちがいい？」

「迷うだけ無駄ですよ！ 好きな方に入って走るだけです！ それでも決められないなら右で！」
自分は直感に従って右に行った方が良さそうな気がすると意思を伝える。自分の言葉に従って、

同行者は右に進む。時間制限がある以上、迷う時間もつたいたない。外れルートであっても遠回りをさせられるだけだろう……時間制限ありで行き止まりを作るのは、詰む事に繋がるからやらないと思うんだよね。

そのまま通路をひた走ると、次は罠が見えた。罠の存在を伝え、罠が発動せずに済む場所を教えるために自分が先に進む。解除する時間が惜しい。解除するのは、解除しないと絶対に罠に引っかかってしまうという時のみだ。

「よっはっつっ」

「次はこつちです！」

飛び石をやる感覚で、罠と罠の隙間を飛び跳ねながら進む。重鎧を着込んだ彼でもジャンプすれば越えられる形で罠が配置されているので、場所さえ間違わなければ問題はなかった。

こちら辺はきちんと調整が入っていると分かる。

「罠エリアを抜けました」

「ありがたい。いつも罠のとりもちなどで時間を浪費させられていたんだ。それをこும்早く抜けられたのは嬉しいよ！」

なるほど、その辺がゴールでできなかった要因なんだろう。ここまで彼の動きを見ていたが、彼は重鎧を着込んでいるのに敏捷性は十分にある。走る速度も速い方だし、跳躍力もある。そうなる

と罠を踏んでしまう彼個人の運の悪さが原因だったのかもしれない。再び走り出した自分達だったが、いくつかの部屋を越えると突如入り口と出口を格子で塞がれた。

「モンスターのお出まし、ですかね？」

「ああ、だがここは俺が本領を発揮できる数少ない場所だ！ 休んでいてくれて構わない」

モンスターが五匹、上から降ってきた光の粒子の中から現れた。ふむ、ならばまずはお手並み拝見といこう。それに、彼の動き方や戦い方を見ずに支援しようとしたら、かえって邪魔になってしまう可能性も十分にある。モンスターはオーガ系が三体、イエティ系が二体。大柄でタフなモンスター達だな。これも時間稼ぎを主としているのだろう。

「あまり時間がないんでな、サクサク行かせてもらう！」

彼はそう叫ぶや否や、最初に近寄って金属製のこん棒を振るおうとしてきたオーガに突きを放つ。速い、たぶん一秒で四回突いたぞ。突いた場所は両肩に心臓、みぞおちだ。

槍が突き刺さった場所から、噴水のように血が噴き出す。そしてオーガは倒れ、動かなくなった後に粒子へと変わって消えた。

強い。何という技の冴えと威力だ。体力があるオーガ系のモンスターをこும்容易く倒すとは。

残る二匹のオーガも同じ形で後を追った。まず両肩、特に武器を持つ右を先に突いて攻撃を封じ、みぞおちで動きを止め、心臓でとどめを刺している。そして何より、その動きがアーツに頼った動

きではない。プレイヤー本人の能力でやってのけている。ここにも猛者がいた。

「一気に来ても良かったんだぜ？ それとも、多勢に無勢はそちらの理念に反するかい？」

イエティ系のモンスターは、オーガ系がやられるまで後ろに控えており、手を出してこなかった。だからこそ同行者の彼もそんな言葉を口にしたのだろう。が、そんな言葉を気にするそぶりを見せず、二体のうち一体が前に進み出てきた。

「そうかい、そういう考えならばこちらがあれこれ言う事じゃないな。手合わせ願う、行くぞ！」

再び振るわれる槍。だがイエティ側もそう簡単にはやられない。白い毛には鎧のような効果があるようで、槍が突き刺さっても血が出ていない。当然、槍の穂先に新しい血も付着していない。刺さりはするものの、肉体までは届いていない。

「G U A A A A A A A A！」

今度はこちらの番だとばかりに、イエティがその剛腕からパンチを繰り出す。この攻撃に対して彼は——回避しながらその腕に対して槍を突き立てた。この攻撃は届いたようで、槍が刺さったところが赤く染まる。だが、深くはないようだ。

「なかなか硬い、な。やはり容易くはいかせてくれないか。時間が惜しいんだが」

危ないところはないが、時間がかかりそうだ。ならば……後ろに待機しているイエティに自分は近寄る。

「待っているだけなのもあれなので……こちらと手合わせしてもらえませんか？」

自分の申し出を聞いたイエティは自分を少し観察すると、目の前に拳をゆつくりと出してきた。

ふむ、これは自分も拳を作って合わせてあげべきだろう。軽く拳を合わせると、イエティは満足したように頷いてから、先に戦っている二人からやや離れた場所へと移動した。

「それでは、参ります」

「G U！」

自分の言葉に來い、と言わんばかりの声を上げ、気合を入れるかのように両手の拳を数回ぶつけるイエティ。その動きが終わったのを見計らってから、自分は【レガリオン】で攻撃を仕掛けた。

このファーストアタックは、イエティの毛を軽く飛ばすにとどまった。ふむ、こちらも様子見の一撃だったが、イエティの反射速度はかなりいいな。

次にイエティが左手のパンチを自分の顔面目がけて飛ばしてきたので、バックステップで間合いの外に逃れる。もう一度胴体を狙って【レガリオン】による斬撃を試みる。

今度は攻撃がしっかりと命中し、イエティの鮮血がパッと宙に舞った。だが、あまり深手を負わせた感じはしない。ぎりぎり少しのけ反る形で深手は回避されたか？

イエティは両腕で掴もうとしてきたので、自分は《スライディングチャージ》をイエティの右足を削るように当てながら背後へと離脱。そこから本当に久々に使う《視》という蹴り技のアーツを

当てる。

つまずいて素早く三回攻撃し、三回とも命中させれば蹴った場所にラインが形成され、敵の内部で爆発するというアーツだ。イエティの毛皮を突破しやすいだろうと思つて使用してみた。

イエティの内側で、くぐもった爆発音が三回。それなりに効いているはずだ……お、イエティが軽くだが確実によけたな。ならばと追撃しようとした自分はずかすずバク転して飛びのいた。

そして、その判断は正しかった。大ぶりだが威力がありそうな裏拳うらけんのような攻撃が、自分が先ほどいた場所を通過していったのである。

（欲張らずに引いて正解か。だがダメージは入った。時間も無いし、ここからは積極的に攻める。引き際を見誤らないようにしながら、な）

そこからは、確実に攻め、確実に引き、欲張らない動きで確実にイエティを弱らせた。

イエティは弱つても、その剛腕おとこは衰えを見せない。あの剛腕をもろに食らえば、クラネス師匠が作った鎧と魔王様からもらったマントがあつたとしても、痛いでは済まない気がする。相手を侮あやむるのは、愚かな事だと散々学んできた。故に、最後までしっかりと仕留め切る。

その戦法を徹底てつていし、ついにイエティは地に伏した。最後に介錯かいしゃくをしてこちらの戦いは終わった。

さて、あちらさんは……どうやらこちらよりも先に終わっていたようだ。槍を持った彼がこちらに興味深そうに見ていた。

「体術と、スネークソードの進化系なのか？　なにせよ、見事だった。さあ、これで全滅させたから扉が開くはずだ。先を急ごう」

彼の言葉通り、出入り口を塞いでいた格子が上がっていく。これで先に進める。残されている時間はあとどれぐらいだろうか？

「俺の感覚だとあと一分ぐらいでこの階層の迷宮崩壊が始まると思う。それまでに少しでも先に進みたいところだな」

経験者の言葉なら、たぶん間違いないだろう。なら、もっと走らないとだめだな。

お互いに頷き合つた自分と彼は、再び通路を走り始めた。ゴールはあとどのぐらい先にあるのだろうか？　一回到着すれば、感覚が掴めるんだが。

それから一分と少々が過ぎたころ、遠くから何かが崩れる音が聞こえ始めた。

「来た、崩壊が始まった！　クツソ、嫌つて程虚空こくうに投げ出されたからな。あの崩壊の音は聞き逃さないようになつちまった！」

まだまだ音は遠いが、確実に物が崩れ落ちる音は聞こえる。ぼやぼやしている時間がない事は、嫌でも分かる。

「崩壊は時間が経つほどに早くなる！　もう残された時間はほとんどないと考えてくれ！」

同行者の彼の言葉に「了解！」とだけ返し、通路をひた走る。

時々分かれ道があり、分かれ道の先に部屋が見えた時はとことん逆の道を選んで走る。部屋に入ってモンスターとの戦いになれば、それだけ時間を浪費する。一回戦って、瞬殺できるレベルのモンスターだけじゃない事が分かっている以上、部屋に踏み込むのは博打にも程がある。

時々罠が見つかるので、そういう時だけは走り抜けられないが、それでもできる限り急いで切り抜けた。解除している暇などない。とにかく走って走って、どんどん大きく、近くなってくる崩壊の音から逃げ続けるだけだ。

そうしてひたすら戦闘が発生する可能性を避けながら走る事しばし、上に太い紐がついている丸い鳥かごのような物が見えた。

「あれがゴールか!？」

「たぶんそうだ！ 乗り込むぞ！」

崩壊の音はすぐそこまで迫っている。

まず自分が転がり込むように中に入り、続いて重鎧の同行者が入ろうとして、バランスを崩した。入り口ぎりぎりではかか足を取られたらしく、後ろに倒れそうになる。

「掴まれ！」

「悪い、助かる！」

すぐさま自分は手を伸ばし、彼の手を取って何とか引つ張り上げる。自分と彼が完全に中に入る

と、入り口の扉が閉まって鳥かごは上昇していく。

ふと迷宮の方を見ると、すべてが崩壊して虚空中に消えていくのが見えた。本当にぎりぎりのタイミングでゴールであるこの鳥かごに到達できたらしい。

「よっしゃあ！ 援軍に来てくれたアンタのおかげだが、なんにせよ俺は初めてゴールにたどり着けた！ ありがとうよ、感謝するぜ！」

嬉しそうにしながら差し出してきた彼の手を取って握手する。

まずは一歩、クリアだ。だが残りは四階。まだまだこれからという奴だろう。

「あとは、他の人ができるだけ多くクリアできている事を祈るのみですか」

「ああ、そうだな。難度が落ちれば……せめて現状維持なら何とかなるだろう。だが難度が上がるとすさまじく厄介だ。モンスターはタフになる上に崩壊の時間も早まるし……絶望的になっちまう」

さっきのエリアはぎりぎりだった。崩壊のタイミングがあと十秒でも早ければ間に合わなかっただろう。彼の言葉通り、これ以上の難度上昇は絶望的な展開にしかならないかもしれない。

そんな会話を交わしている間も鳥かごは上昇を続け、そして足場にたどり着くと動きを止めて扉が開いた。

「降りてあの足場に乘れ、という事でしょいか」

「そうだろうな」

自分も彼も初めてなので勝手がイマイチ分からない。とにかく降りて足場に乘る。すると、足場から七芒星の魔法陣が浮かび上がり、どこかに飛ばされた。

その先には――最初に別々の入り口に入った同行パーティメンバーがいた。ただし、二人だけだ。二人とも軽鎧を着ている面子である。

「おお！ クリアできたのか！」

「これでクリアは三人、難度の上昇は抑えられるだろうな。やっぱり助っ人の有無はでかいって事か」

どうやら、ここはクリアできた人の待合室みたいな場所なんだろう。周囲を見渡すと、質素な部屋で、七人が座れる丸いテーブルと七つの椅子があった。テーブルの中央にはフルーツの盛り合わせが置かれ、七枚の皿と一通りのカトラリーも確認できた。とりあえず椅子に腰を下ろす。

「ここは安全地帯だからのんびりしていい。全員が揃ったら進むという意思を見せると、再びダンジョンの入り口に飛ばされるようになっていく。あと、中央のフルーツは自由に食べて良い。食べるとHPやMPが急速に回復するから、むしろ食べておくべきだな」

軽鎧を着たプレイヤーの一人が、この施設の内容を教えてくれた。なら、ひとまずは精神的な休息を取りつつフルーツをいただくか。

桃をチョイスして、適当に切って食べる。ふむ、甘くて水気もたっぷりでおいしい。口の中でとろけて消えていってしまう。

「さて、そろそろ良いか？ お前から見て助っ人はどうだった？」

「どうだった？ なんて聞いたら失礼すぎるぜ……俺が間に合ったのはすべて助っ人のおかげだからな。罫は見切るし、戦闘も加勢してもらったし、ものすごく進みやすくしてくれた。戦闘一辺倒な俺とは色々と違いすぎる」

自分と一緒にいた重鎧のプレイヤーに対して、自分の働きを確認したかったのであろう。軽鎧を着たプレイヤーの問いかけに対し、重鎧のプレイヤーはすぐさまそのように返答していた。

なににせよ、役に立てたようでほっとした。

「もう一回、俺に同行してほしいぜ。彼がいてくれれば、次もきつとゴールできる」

「そこまで言うか。すげえ奴が来てくれたんだな」

評価が高すぎて、ちょっと気恥ずかしい。ま、満足はしてもらえている事は間違いないので、それは良いんだが。

「そろそろ、どんな展開でもタイムアップだな。あと少ししてここに来なければ、虚空に落ちたって事になるな……」

「虚空に落ちた場合の復帰地点はここじゃない、って事ですか」

インターフェースを開いて時間を確認した軽鎧のプレイヤーに、自分はそう問いかけた。

「ああ、もう一つ集合場所があつてな。虚空に落ちた場合はそっちに行くんだよ。だが、そっちとこっちはあとで繋がるから問題はない……ただ、この中央にあるフルーツがそっちでは出ないので食えない。だからアイテムを使って立て直す必要があるな」

なるほど、そういう区別があるのか。このフルーツはクリア者だけの特権と。

そして数分ほど待ったが……新しくこの部屋にやってくるプレイヤーはいなかった。と、そこでテーブルの上に突如画面が出現した。

『悪い、こっちは三人が失敗した。そっちには……マジか。お前がゴールできたのかよ!? こっちにいなかったからまさかとは思ったが、こうして見ても信じらんねえ』

「おうよ、助っ人様様つて奴だ！ 初めてこのフルーツが食えたぜ！」

ふむ、向こうの部屋はこと比べると色々とぼろい。物の配置は同じだが、テーブルはひび割れているし、部屋の壁もヒビだらけ。失敗した側という事が一発で分かるようにしている訳か。

『だが、半分はクリアできてホツとしたぜ。これなら難度が跳ね上がるって事はないな』

「ああ、三人クリアした場合には極端な難易度変動は今までなかったからな。二人になると結構あつたから、三人クリアできたつてのはやっぱりかいな」

三人がぎりぎりのラインつて奴か。じゃあ四人ゴールできた場合は、難度が易しくなるのかもし

れない。

「さて、次だが……全快してからスタートするのは当然としてだ。助っ人を誰につけるかだな。来てほしい奴はまず手を挙げよう。そこから話し合いをしようか」

そんな言葉が出たとたん、重鎧を着ているプレイヤー全員が手を挙げた。

「やっぱりこうなつたか……」

『まあ、そうだよな。今までクリアできずに苦しんでたあいつがクリアできているって時点で、かなりのやり手なのは間違いない。俺だって来てほしいところだが、やっぱり機動力が厳しい面子の誰かにつけるべきだつて思うから自重した』

こうして話し合いが行われたんだが、誰も引かなかった。仕方がないので、クリア経験が一番少ない彼に……つまり最初に同行した重鎧を着ているプレイヤーにもう一回つくという話になった。

その後は各自一回ずつ同行するという方向で固まった。

「よし、ではそれで行くぞ。回復したら次だな」

『ああ、次はクリアしてみせるさ。こっちの部屋には何度も来たくないからな』

回復を待つ間雑談をして過ごし、次の階に挑戦する準備を整えた。さあ、次も彼と共にゴールを決めてみせようじゃないか。

そうして次の階へと再び進む自分と重鎧の彼。だが――

「なんか、一階と比べるとずいぶんと楽なような？ 罠の数は多少増えたのは間違いないが、部屋の中にいるモンスターの格はずいぶんと落ちている」

非常に順調に進んでいる。罠の数は増えたが、自分が見切れるので問題はない。

そして部屋の中に入った時に戦わされるモンスターのランクが、ゴ布林レベルに落ちていた。出現する数が極端に増えているような事もないので、重鎧の彼が槍を振るえば鎧袖一触と言わんばかりにふき飛ばされて簡単に全滅する。

「いや、その言葉は罠が見切れるから出るものだ。俺だったら一階よりもこっちの方が辛かったと思うぞ。もしここに一人で来ていた場合は、絶対に罠を踏みまくってまともに動けなくなってる」
重鎧の彼の言葉に自分は頷く。出てくる罠はトリモチだとかとらばさみだとか、小さな檻おびに閉じ込めるようなものばかりである。

遅延を強いてくる罠ばかりなので、一回でも引っかけたら、その後が辛い事になるのは確かである。

「重鎧を着た片方が盗賊系のスキルを持っているんだが、罠を素早く見切れずに突破できなかつたという報告を上げてきた事が数回あった。だが、お前さんはそういう事はなさそうだ。戦闘もできるし……どういいう経験を積んできたんだか。やっぱり助っ人を選ばれるというのはそれぐらいの実

力がなきやダメという事なんだろうな」

まあ、並の実力では助っ人にはなれないだろうねえ。

自分はまあ、複数の師匠にあちこちでとんでもないアクションやら潜入やら、一般的ではないプレイをやらされたので、その経験が生きている事は間違いない。

だからこそ、こういう場所に助っ人として呼ばれても焦らず慌てず冷静さを維持できる。

「このペースを維持できれば、ゴールは間違いないはず。あとはトラブルのいかに対処できるか……右側に罠複数、左側を走って！ それで回避できる！」

この階の罠は、数は多いのだが一階のように起動スイッチがまばらに置かれているという事が無い。妙に固まって配置されているのだ。何というか、置き方が雑である。

もっとも、途中まではそうやってこちらの油断を誘い、ゴール付近で突如嫌らしい置き方をしてくる可能性も考慮している。

「また部屋、警戒を！」

「モンスターが出てきた時は任せろ、俺が瞬殺する！」

部屋に入ると、再び出入り口が閉ざされて室内にゴ布林達が次々と現れたが――重鎧の彼が振るう槍がうなりを上げて一閃いっせん。ゴ布林達の首を一瞬ですべてはね飛ばした。

その一閃は実に美しい軌跡を描いた……やっぱり戦いになればこの人は頼れる。

「お見事！」

「これが俺の役割だからな、先を急ごうぜ！」

すぐさま部屋を突破して駆けだす。これを数回繰り返して、ついにゴールの鳥かごが見えた。だが、ここで特大の罠が仕掛けられていた。通路には罠の起動装置が十メートル以上にわたって隙間なくびっしりと敷き詰められ、どれか一つでも起動すれば大量のトリモチで動きを封じられる仕組みとなっている。

ゴールを目の前にしてトリモチ地獄で奈落に落とす事で、プレイヤーの心を確実に折ろうという考えか。やっぱり性格悪いわ。

「罠の内容は分かった。突破はできるのか？」

「もうちょっと調べさせてほしい。何か、この罠を突破する方法が隠されているはず。絶対にクリアできないようにハメる事はしないはずだから」

幸いここまで素早く進めたのでまだ崩壊は発生していない。

罠だけでなく周囲を確認すると……なるほど、罠エリアを越えた先に小さなスイッチが隠されている。スイッチは罠の起動部分に伸びており、押すと起動を止められると予想できる。

「しかし、あのスイッチはどうやって押すんだ？ 助走をつけてジャンプしても、とてもじゃないがあそこまで飛ぶ事はできないだろう？」

「大丈夫です、こつちがどうにかしますので。ではさっさと片を付けてきます」

そして自分は壁に向かってジャンプ、そこから壁を蹴って……残滓ざんしとなってしまった【真同化】まどかの残されている力であるアンカー能力を発動。天井に突き刺してもう片方の壁に飛ぶ。

再び壁を蹴ると、【真同化】のアンカーを天井に突き刺して壁に飛ぶというのを繰り返す。上から見ると、ジグザクと斜め移動をしている形になっているはずだ。

途中でミスするような事はない。この程度なら焦らない限り余裕をもってできる。一応《フライ》もあるんだが、頼らずに済んだ。とにかく無事に罠ゾーンを渡り切り、スイッチを押す。

わずかな振動の後、罠の起動装置が地面の中に引っ込んだ事を確認。今なら渡れるだろう。

「今のうちにこつちに！」

「分かったぜ！ しかし、まるでワイヤーアクションのような動きだったな。それを映画じゃなくてゲームで見られるとは……くそ、キャラクターが複数作れるんだったら絶対に真似したぞ」

罠エリアを抜けた重鎧の彼がそう口にする。「ワンモア」は一人一キャラだからね……残念ながらそうはいかないんだよなあ。

「これも適所適材、という事で。とりあえずゴールしてしまおう」

「そうだな、さっさとゴールしよう」

鳥かごに乗り込み、ゴールに到着。中に入ると、誰もそこにはいなかった。



「俺達が最速か！ よっしやあ！」
重鎧の彼はガッツポーズを決めて大喜びしていた。別にトップになったからって何かある訳じゃないが、それでも嬉しいよね。とりあえず、彼と何か話をしながら待つとしますか。

「……という感じでな、魔王領での旅はなかなかハードだったな。吹雪ふぶきにあうのは仕方がないにしても、その後の備えに対する見積もりが甘すぎたって事を、あの時は皆で後悔したぜ」
そして、今は彼のパーティの冒険譚ぼうけんたの一部を聞いている。彼らもなかなかハードな経験をしてきており、特に魔王領内で迷い、吹雪や食料の枯渴こかつを乗り越えて何とか皆で生き延びた時の話は臨場感があり、面白かった。

「魔王領と言えば、自分は料理を作るので右往左往してた時があったね……とろピグという名前で売り出されている料理なんだけど」

「え!? あれアンタが作ったの!? 俺達も食いに行ったが、すげえ美味い角煮うまだったぞ!」
魔王領でピジャク肉を使った料理を四苦八苦しながら完成させた話をすると、どうやら彼は食べた事があるようで驚かれた。

なので、その証明にアイテムボックス内に眠らせてあったピジャク肉の料理を出して、彼に振る舞う。彼は兜の口部分を開いて、口に角煮を運ぶ。そんな機能があったのね。

「うっま！ そうそう、これだよこれ！ まさかここで食えるとは思わなかった！ って事は、黒衣の料理人つてのはアンタだったんだな！ そりゃプレイヤーじゃ、毎日店に顔を出して料理を出せる訳がねえか……こんなところでこんな事実を知るとはな……それにしてもやっぱりこれは美味いぜー！」

一人分のピジャク肉料理を彼が食べ終わるころ、部屋に次のプレイヤーが姿を見せた。軽鎧を着ている人だ。

「マジか!? 俺がトップだと思ったのにな……しかし、この匂い……魔王領の店で食ったあの料理を思い出すな。待て、その食器に残されている色……まさか!?」

「当たり前だぜ。あの時、俺達皆で美味しい美味いと言って食ったあの角煮だ。やっぱり美味かったぜ」

そんなやり取りが交わされると、軽鎧を着込んだプレイヤーが重鎧の彼に詰め寄った。

「そんな美味しい飯を、お前は独り占めにした、と?」

「あー！ いやそうじゃなくてな? つい感動してその、なんだ、食っちゃったってだけで。誓って悪意はない！ 本当だ！」

あの上、それは言い訳にもなっていないと思うんだよねえ。

事実、軽鎧のプレイヤーはさらに詰め寄ったし?

「感動したつてのはまあいい。俺ももう二度とこの香りを嗅ぐ事はないと思っていたからな。だがな………だったらなおさら残せや！ 空っぽにしてる時点で、悪意云々のお話はどうでもいいんだ！ ただ一つ、お前が独り占めして食っちゃったという事実があるだけだ！」

まあ、そりゃそうだ。食い物の恨みはちよつとやそつとじゃ晴れないからね。

とはいえ、彼には悪い事をした。えーつと、まだ数はそれなりにあるな………自分は再びピジャク肉の角煮を取り出した。

「ままま、そこまですておきなさい。ほれ、お前さんの分はここに用意したから」
肩を叩いて、角煮を目の前に出す。これで落ち着くだろう。

だが、角煮を見せられた軽鎧のプレイヤーは、なぜか動かなくなった。そしてたぶん一分ぐらいしてからこう自分に向かつてつぶやいた。

「――あなたが神か」

なんでそうなる。しかも、向けてくる気配がすごく真剣だ。

自分から角煮を受け取り、テーブルに座ってから兜の口部分を開いて、角煮をじっくりと味わうように咀嚼している。そしてこうつぶやいたのだ。

「美味い……ああ、まさかこの味をこんな場所で再び味わう事ができるとは………近くに美味しい角煮を出す店などなく、もう一度味わうのは難しいと思っていたのに………ああ、何という僥倖」

コメントしづらい。彼はそのまま、ピジャク肉の角煮を完食した。

まあ、とにかく美味しく食べてもらったのならよかったんだ。うん、それでよしだろう。

その後、もう一人軽鎧を着たプレイヤーが時間ぎりぎりに姿を見せて……この階は崩壊した。

「今回もゴールできたのは三人……そして、一階と二階の様子から、次は罠を重視したタイプの迷宮なのは間違いないだろう」

同行パーティの一人が口にした言葉に、自分を除く全員が頷いていた。

『薄々予想はしていたけど——やっぱりそうか。面倒なのが来たなあ。モンスターの数が質が重視されるなら俺もゴールできる可能性が高まるんだが』

ゴールできなかったエリアにいる重鎧を着たプレイヤーが、そうぼやいていた。

「まあ、仕方がないだろ。どれが来るのかは入ってみるまでさっぱり分からんのだから。それに助っ人のおかげで、一階も二階もゴール者は三人を維持できた。これは十分に良い結果だ。この調子なら、今回こそゴールできるだろう」

と、今回ぎりぎりでゴールできた軽鎧を着たプレイヤーが自分の意見を口にする。そうだね、少なくとも難度の大幅な上昇は抑えられているはず。それだけでも十分に良しとしていい。

『そして次だが……助っ人はこいつをサポートしてやってくれ』

『頼むぜ、助っ人さん』

と、ゴールできなかった側の部屋にいる人達からそう告げられる。自分も彼に手を挙げて答えた。「腕は確かだぞ、彼。俺が二回ともゴールできてくるからまあ分かってるだろうが……正直、残り三階もついてきてほしいぐらいだ。罠の見切りだけじゃなく、戦闘もこなしてくれるから……」先ほどまで同行していた槍使いの重鎧プレイヤーからそんな言葉をいただいた。満足してもらえたようで何よりである。

「その期待に、ここをクリアできるまで応え続けられるように頑張りますよ」

自分はそう返答しておいた。

「残り三階だが、何としてでも最低三人はゴールできる状態を維持したい。だからそっちにいる面子はもっと気合を入れてくれ。まあ、確かに気合だけでどうこうできない事が多いのは事実なんだが、それでも助っ人がいるから任せればいいやーなんて考えにならないようにな」

そんな言葉で、話し合いは締めくくられた。

次は三階。先ほどの話し合いでサポートしてほしいと言われた重鎧を着た彼と突入場所で合流し、準備を整える。

それとですね——さっきまで同行していた重鎧のプレイヤーさん、子犬みたいなオーラを放つてどうしても行っちゃうの？ みたいな圧をかけてくるのやめてくれませんかね？

他の面子も気が付いており、何やってんだという空気が漂^{たは}ってるんですが。

「なんか、すまんな」

「いえ、まあ、彼の気持ちも理解はできますので」

今までクリアできなかったのに、二回も連続でクリアできればそりゃあ嬉しかっただろう。そしてまたクリアできなくなるとなれば、そういうオーラを放つのも無理はない。

放たれたとしても、こちらはどうしようもないんですけどね。

「では突入するぞ！ ほら、いい加減諦めろ！ お前はもう二回もサポートもらってるんだから、ここからはお前の力だけで頑張るんだよ！」

ついに、槍使いの重鎧プレイヤーに対して他のプレイヤーからケツに蹴りが入った。

そんなやり取りののち、三階に突入した自分と同行者。さて、彼の得物は……左手に槍、右手に巨大な盾を持っていた。相当に分厚い作りであり、厚さ二十センチ以上は間違いなくある。

自分では両手でも持ち上げる事は難しいだろう。

「ではよろしくな。進もうか」

「え、あ、はい。行きましようか」

盾に見入ってしまったが、同行者の言葉に我に返って前進開始。近くに罠はなし、走って移

動して良いだろう。

「罠は今のところ確認できず。このまま前進で」

「OK、じゃあサクサク行こうか」

流石に装備の重量上そこまで速く走れはしないが、それでも十分な速度で前進できている。一階と二階の経験から計算して、この速度ならゴールに到達する事は十分に可能だ。むしろ、あの重量でこの速度で前進できる事自体がとんでもないんだよなあ。おっと、分かれ道が。

「右手に部屋が、左だと今まで通りの通路です。ただ、左の通路は罠がそれなりにある事を確認」

「よし、部屋に行こう。モンスターが出て俺が戦う。もし数が多くて手間取るようなら、できる範囲で援護をもらえないか？」

そして右の部屋の中に。だが、モンスターは発生しない。一応部屋の中に罠がある可能性もあるので確認したが、特になかった。

「この部屋はただ通過するだけかな？」

「モンスターと出会うかも、という感じにこちらを惑^{まど}わす事が目的なんだろうな。今後も部屋と通路があった場合は部屋に入る事を選択しよう」

同行している彼の見立ては正しいだろう。部屋に入ればモンスターとの戦闘になる可能性があるから回避するべきか否か。そう考えさせる事で時間をわずかでも使わせようとしているのは間違い

ない。

「了解、では今後は部屋優先という事で」

「もし両方部屋だった場合は右一択で頼む。人の本能で、無意識に左を選ぶ人が多いっていう情報をネットで見た事がある。だからそれに逆らわせてもらう」

なるほどね、そういう考えがあるならこちらが反対する理由はない。同意して前進を続ける。

いくつかの罠を回避しながら進む事数分、再び分かれ道が。

「今回は左右どちらも部屋なので右で」

「ああ、急ごう」

部屋に踏み込むと、今回は閉じ込められた。さて、どんな奴らが出てくるか……オーガが一匹だけ。だが、このオーガはアルビノのように真っ白な体を持っていた。ユニーク個体かもしれない。

最悪ネームド……強敵の可能性は十分ある。

「まずは俺が出る。支援するかどうかの判断は任せる！」

そう言うと、盾を構えて同行者である重鎧のプレイヤーがオーガの真正面から突っ込んだ。オーガもそんな彼の行動を見て、防御態勢を取った。

まずは真っ向勝負でぶつかり合ってみようという事なのかもしれない。《シールドバッシュ》による盾の攻撃とオーガの腕がぶつかり合って、なかなか派手な音が出た。

「やるな！」

「GU！」

彼の言葉にオーガもお前もな、みたいなニュアンスの声を出した。とりあえず自分は見に徹しよう。彼の動きや戦いの癖も見ないといけないからな。

さて、戦いの方は——お互い牽制しながら攻撃し合っている。どうやら同行プレイヤーは盾による打撃攻撃が本命らしく、槍はそれを入れるための補助武器といった感じがする。

オーガは言うまでもなくその剛腕で、殴るだけにとどまらず時折掴むような動作を見せる。投げ技を習得しているのだろうか。それとも掴んだ後に締め上げるのかもしれない。

とりあえず今はまだ同行プレイヤーを掴む事はできていない。そんな戦いがたぶん二十秒ほど続いた後、同行プレイヤーが再び《シールドバッシュ》の構えに入る。

「《フルブーストバッシュ》！」

なんと、盾の上下に隠されていた小型ブースターのようなものが展開し、尋常ではない加速力でその質量をオーガに向かって叩きつけた。妙に盾が分厚いとは思っていたが、この仕掛けを内蔵させるためだったのか。

この攻撃にオーガはとっさに全力で防御の姿勢を取ったが——壁までぶっ飛ばされた。オーガの巨体があんなに派手にぶっ飛ばすとは……とんでもない威力だという事が分かる。

「G……」

だが、ぶつ飛ばされたオーガも容易く終わってなるものかと、吐血しながらも立ち上がってくる。そして構えを取った。その威圧感が肌にはびりびりとしたものを走らせる。

やっぱりこのオーガは普通じゃない。同行プレイヤーもそれを十分に感じ取ったようで、じりじりと距離を詰めながら様子をうかがっている。

「G A A!!」

その咆哮と共に、オーガは同行プレイヤーに猛進。全力で掴みかかってくる。

同行プレイヤーはその腕を一回は盾で弾き、二回目は槍で突いて動きを牽制したが、三回目で捕まった。オーガは掴んだ同行プレイヤーごと跳躍し、地面に叩きつけた。プロレスで言うならパワーボムのような形だ。

「ぐは……」

同行プレイヤーから苦悶の声が上がる。マズイ、あれは相当に効いている。あの腕力に加えて高さもプラスされた叩きつけだ。鎧が高性能でも、その衝撃は容易く中に届いてしまう。

と、ここでオーガはちらりとこちらを見た。かかってこないのか？ と目が言っているように感じた。

「分かった、ならばここからは自分が相手を務めさせてもらおうよ」

そう口にする、オーガは吐血しながらもかかってこいとばかりにくいくいと指を動かした。その姿が妙に格好よく見えたのは気のせいだろうか？ なんにせよ、強敵だ。気を引き締めて挑もう。

さて、まずは一当てしようか。そう考えて弓矢を構えたわけなのだが……狙いをつけた瞬間、背中に悪寒が走った。この悪寒は、かなり前に感じた事があるぞ。

（待て。こちらが弓矢を構えているというのに、なぜあいつは防御態勢も回避行動も取らない？そしてさっきの悪寒は……黄龍様と戦った時と同じ感じ……まさかこいつも？）

飛び道具を無効化、ではなく反射してくるのではないだろうか？ そういう能力があるなら、逆に攻撃を受けた方が都合がいい。ありえるな。

自分は弓を構えたまま前方にダッシュ。矢を射る振りを続け、近距離攻撃が届く間合いに入った瞬間、矢を外して【八岐の月】についている爪で攻撃した。

「GU?」

この自分の攻撃を、オーガは回避した……が、わずかに間に合わなかったようで、右腕に薄く四つの線が引かれ赤い血が染み出してくる。

これではぼ確定、遠距離攻撃はダメだ。近距離戦で戦うしかない。再び距離を取った自分は【八岐の月】を取めて、【レガリオン】を握る。

「では、続けようか」

ダウンしているプレイヤーから意識をそらすべく、そんな言葉を口にしながら【レガリオン】の切っ先の片側をオーガに向ける。

お互いにじりじりと距離を詰める。本来ならばできるだけ早く撃破したい。だが先ほどのオーガの投げ技の威力は強烈だった。下手を打って掴まってしまうえば、高高度落下式パワーボムとでも表現すればいいのか、とにかくあまりにも危険すぎるあの投げ技で最悪一発で殺されかねない。なので、うかつに攻められない。

とはいえ、ずっとお見合いしている訳にもいかない。向こうはそれでもいいが、こちらはクリアするためにさらに進まなければならぬのだから。

なので、やむなく自分は前方に向かって一気に距離を詰め——相手の間合いに入った瞬間バックステップしながら、【レガリオン】の刃をスネークソード状態にして切りつけた。

オーガはこれに引っかけり、間合いに入った瞬間勢い良く掴みかかりに来た。だが、当然自分はずぐさまバックステップしているのでその場におらず、盛大に掴みを失敗して隙を晒した。

そのタイミングで、自分の【レガリオン】による攻撃がカウンターのように当たる。今度の攻撃はしっかりと入った事もあり、当たったオーガの左腕は激しく出血した。

このダメージでわずかではあったが、オーガが怯んだ。すかさず自分は右手を狙った一撃をオーガに向けて放つ。浅いが、この一撃も入った。オーガの右腕から、出血が確認できる。

が、これで戦意を喪失するような相手じゃない。

「GOOOOOO!!」

むしろ、このダメージを受けてやる気満々というような雄たけびを上げた。しかし、こちらとてそんな雄たけび一つで怯むほど柔かな精神はしていない。

オーガの睨みつけてくる視線に、全力で睨み返す。すると、オーガはにやりと笑みを浮かべた後——素早くこちらに突進し、右のストレートを顔面目がけて放ってきた。

自分はそれを軽く右側にいなして狙いをずらし、お返し【レガリオン】による攻撃をオーガの右腕に叩き込んだ。今度は、浅くない。しっかりとした手ごたえを感じる。

切り裂くときまではいかなかったが、大量の出血を強いる事に成功した。流星のオーガもこれには痛みを我慢できなかつたようで、とっさに左手で右腕を押さえてしまう。

「悪いが、いただく！」

まだ先がどれだけあるか分からない以上、ここで時間をこれ以上浪費する訳にはいかない。【レガリオン】の刃をスネークソード状態にして、オーガの首へと伸ばす。

刃は狙いたがわずオーガの首に吸い込まれるように命中し、オーガの首を飛ばした。

もしここが修煉場などであったのなら、もっとこのオーガと、こんな手段を使わずに戦っていたかったのだが……仕方がない。

オーガの首が地面に落ちるとほぼ同時に体も消え、部屋の封鎖も解除された。これで進めるが、同行者の様子はどうか？ 自分が駆け寄ると、彼はまだ倒れたまま苦しそうにしていた。

「わりい……「麻痺」が……抜けねえ……」

さっきの投げ技には「麻痺」の効果もあったのか。やはり、投げを喰らったら自分もお終いだっただ可能性が高い。もちろん鎧やマントの効果で凌げた可能性もあるが……それでも試したいとは思えない。ひとまず「麻痺」を治すポーションを飲ませると、何とか彼は立ち上がった。

「まさか、戦闘で足を引っ張るとは……すまん」

「いえ、あの投げ技は初見では見切りにくいから仕方がないでしょう。それより、走れますか？ かなり時間を食ってしまっています。急がなければ」

あとどれだけの時間が残っているか……とにかく走るしかない。

部屋を出て、通路をひた走るが——今度は畏が前を阻む。

配置が嫌らしく、上手く飛び越えないと踏んでしまうようになっており、時間がさらに削られる。さらに、崩壊が始まる音まで聞こえてきてしまった。

「崩壊が……できるだけ急ぎましょう！」

「ああ、助っ人に来てもらっているのにクリアできないのは避けたい！」

が、畏がこちらの速度を削る。踏んでしまえば十中八九、アウトだろう。だから時間をかけても

回避して進むほかないのだ。でも、聞こえてくる崩壊の音が徐々に大きくなってくる事が焦りを誘発する。くそ、本当に趣味が悪い！

それでも何とか、ゴールに運んでくれる鳥かごが目に入ってきた。通路も一本道、だが畏はいっぱいだ。自分だけならサクサクゴールできるが、後ろから必死に追いかけてきている同行者もゴールできるように道を教えなければいけない。

崩壊はもうすでに自分達の真後ろまで迫ってきていた。ワンミスで終わってしまう。

「こっちから進みます！ 自分と同じ場所に飛ぶ感じで！」

「分かった、何とか食らいつく！」

必死に飛ぶ自分と同行者。あと五歩、四歩、三歩……越えた！ 鳥かごの中に飛び込んで後ろを振り返った瞬間——同行者が最後の最後で畏をかかどで踏んでしまう光景を見た。

畏が起動し、四方八方からトリモチが彼に向かって発射される——

【真同化】 あっ!!!

自分は鳥かごの柱を掴むと、ワイヤーのような【真同化】の残滓を右手から発動。トリモチが多数付着して今まさに倒れようとしている同行者を無理やりからめとり、強引に引っ張る。

(流石に重い！ だが、頑張ってくれ！)

このタイミングで迷宮は完全に崩壊した。眼下に虚空が広がる中、上昇していく鳥かごの中から、

自分は彼をか細い【真同化】の残滓だけでゆっくりと引き上げた。

かなり辛い作業で、ちらりと視線をHPに向けると、じりじりと減っている事が確認できた。やはり、相当な負担のため、HPにダメージが入ってしまったている。

だが、見捨てる訳にはいかない。見捨てたら、ここまで来た意味がない。歯を食いしばり、ゆっくりにあるが確実に彼を吊り上げる。

【真同化】が千切れてしまわないかという恐怖心もあったが、その一方で数々の戦いを経た【真同化】はそんな柔じゃないという感情も同時に湧く。

そんな心身共に戦う吊り上げ作業は、鳥かごが止まる直前まで続いた。だが、やり遂げた。

「本当にありがとうよ！ お前がいなかったら俺は間違ひなく終わっていた！」

まだトリモチが剥がれていないので、芋虫いもむしのようになってしまっている彼が感極まった声で感謝を述べてきた。

このトリモチは時間経過で自然に剥がれるので、それまで我慢していればいらしい。とはいへ鳥かごから降りなきやいけないんだが……仕方がないので、彼を樽たねを転がすように降ろさせてもらった。

「おお、ゴールできたのか！ ってまた面白い形で入ってきたな！」

例のゴールした者の部屋の中に入ると、自分に転がされる同行者を見て、他の同行パーティのメ

ンバー二人が笑い声を上げた。一種のギャグに見えなくもないからねえ。

「最後の最後にドジを踏んで、終わったと思つたところを助つ人に救ってもらつた以上、笑われる程度なんでもねえ！ ……いや、やっぱり精神的に来るからやめてもらつていいですか？」

おい、格好良かったのに台なしだよ。そこは最後まで頑張ろうよ。

「でも、その状態を見れば罨を踏んで絶体絶命だつたつてのは分かる。俺も経験したからな。嫌な経験だけだよ！ そこからどうやってゴールさせてもらったんだよ？」

「いや、実はな……」

そして、なぜトリモチまみれなのにゴールできたのかの説明が、彼から行われた。重鎧を着たプレイヤーを一人で引つ張り上げた、という事が判明すると、本当か？ という驚愕と理解できないといった感じの視線が一斉に自分に飛んでくる。

「重かつたですよ。いや、正直きつかつた」

「普通そんな言葉で済む話じゃないと思うんだが……だが、あいつがああ状態なんだから本当の事なんだよな……いやでも、なあ」

自分の言葉に、歯切れの悪い返答をしてくるプレイヤーの一人。でも実際やつちやつたんだから、彼がここにいる訳で。

「何にしろ、これで三人クリアのラインは守れた。これは大きい。本当に助つ人様様としか言いよ

うがねえな……彼がいなかったら、絶対俺とこいつの二人しかゴールできてないだろこれ」
そして、もう一人のプレイヤー。

そうだね、三人クリアのラインを守れてよかったよ。無理した甲斐があった。
と思っていたタイミングで、クリアできなかった方の部屋にいる人達との通信が繋がる。あと二階クリアで良かったはずだよな。引き続き頑張らねば。

2

次のダンジョンに挑む前に、先ほどのダンジョンでどういう事があったのかをお互いに発表し合った。その結果だが。

「なるほどな、そんなオーガが出てくるとは……外れを引かされたって事か。いや、助っ人がいるから外れを回されたのか？」

外れとは？ と問いかけてみたところ……大体この試練は畏が多いか、モンスターが多いか、数は少ないがモンスターの質が高いかの三パターンがメインらしい。

しかし、ときたまこのパターンから外れたダンジョンが生成される事があるんだと。で、当然そ

ういう例外パターンだと厄介な存在がうろつく。

「以前に出た奴だと、カウンターが得意なゴブリンだとか魔法が得意なゴーレムとか。で、とにかく強い。畏のパターンだと、これどうやって抜け出せというんだみたいなえぐい封鎖を喰らう事がある。というか喰らった経験あるんだよな」

ネームドモンスターになる一步手前ってところかね？

普通のモンスターと比べるとはるかに強いつて事だけは間違いない。実際出会ったあのアルビノオーガも、重鎧を着たプレイヤーを投げ一発で行動不能に追い込んだしな……

「が、外れは一回の試練に多くても一度しか出ない。だから残り二階ではそういった外れパターンは存在しないと思ってくれていい」

本当かなあ……が、経験者の彼らに反論するだけの情報も経験もないからここは頷いておく。

でも、「ワンモア」だよ？ 油断させておいて、こちらがあと少してクリアできるつてところにもろくでもない攻撃をぶち込んでくると考えておいた方が身のためだろう。

「なににせよ、外れを引いてなおかつゴールしてくれたという事実はすごく重い。今回でクリアできなきゃ、マジでどれぐらいかかるか分かったもんじゃない。お前ら気合を入れ直せよ？ 助っ人に頼りすぎんじゃねえ！」

軽鎧のプレイヤーの言葉に他の五人が同意し、話し合いは終わった。その話し合いの間に自分は

フルーツを食べて消費したHPを完全に回復できた。これで問題なく次に進める。

「で、助っ人さんには予定通り、重鎧を着たこっちのメンバーの最後の一人に同行してくれ。しんどい事はっかりやらせて申し訳ないが、頼む」

「了解、まあ何とかやってみますよ」

最後の一人は、片手斧かたておのと盾を使うタンカータイプだそうで……レイジに似ているな。彼と一緒に戦った経験が使えるだろうか？

「しかし、俺のトリモチはいつ取れるんだ……少しは動けるようになってきたが……」

さっきのダンジョンで同行し、最後に吊り上げた重鎧の彼はまだトリモチの大半がくつついたままだった。ある程度は取れたんだけど、まだまだ完全に剥がれるには時間が必要そうである。

「時間が経つのを待つしかないだろ……普通はそうならゴールできないんだがな」

その言葉通り、剥がれるのを待つしかないだろうねえ。流石に完全放置はかわいそうなので、フルーツをいくつか適当に選んで彼の口に運んであげたが。

「まあ、こいつのトリモチが剥がれるまでは休憩だな。三階登って、プレイヤーの方にも疲労がたまってくる頃だ。ここで時間をかけて休息を取っておく方が良いから、ちようどいいだろ」

そう言いながらも、口元が笑っているんだよねえ。半分は面白がっているのは明白だ。

で、当然トリモチが絡みついている彼もそれは分かっている訳で。

「そっちが同じ光景になったら、覚えてやがれ」

と言っていたりする。

それから大体十分ぐらい後だろうか？ 彼からトリモチが完全に剥がれたのは。

なんにせよ、これで先に進む事ができるだろう。彼自身は「休んだ気がしねえ」とぼやいていたが。

そして、再び六人がバラバラに入場するダンジョン入り口へとやってきた。

「さて、あと二階だ。だが、ここまで大幅な難度上昇は回避したまま来る事ができた。これは大きなチャンスだ、逃すなよ！」

同行パーティのうちの一人がそう改めて声を上げ、全員が気合を入れ直してから入場。

片手斧と盾を使う重鎧のタンカーさんと一緒に入った先は……うん、今までと大差ないダンジョンが広がっていた。

「では、よろしくです」

「こちらこそ、よろしく頼む。罠の見切りをお願いする」

これまで通りに自分が先に出て、罠を見つけたら注意を飛ばしながら回避する。今までと違うのは……部屋が出てこない事だ。

「部屋が出てきませんね」

立ち読みサンプル
はここまで

「通路がメインのパターンだろう。なんにしろ、戦闘で時間を浪費させられないのは助かる。罨はそちらがすべて見切ってくれているから引つかからないしな」

同行している彼の言う通り、部屋がないおかげで足を一切止める事なく進めている。

ただなあ……順調に進めているとどうにも裏があるように感じて仕方がなくなるんだよ。今までが今までだけに、順調に進んで問題なく目的達成なんて展開はないと考えてしまう。

本当にこの階は、罨を回避するだけで通過できるのだろうか？

自分は内心でそんな事を思いつつも、罨を回避しながら通路をひた走る。そりゃ多少は罨の範囲が広くて慎重に進まなければならない場所があったが、それでも障害と呼ぶには弱い。

なんて事を考えながら進んでいたら、ゴールできてしまった。

「これで終わり、ですな」

「いやあ、すぐ楽をさせてもらった。部屋がないパターンを引いたのは運だが、罨を一度も踏まずに進めたのは助っ人である貴殿の力だ。素晴らしい」

そうしてゴールの鳥かごに乗ろうとして……自分は足を止めた。

「どうした？」

「これは……違う！ これはゴールに連れていってくれる鳥かごじゃない！」

近づいたとたん、急に罨判定が鳥かごそのものに発生した。もし乗ったら、たぶん上昇していく

途中で突如落下を始めて虚空に落としてくるってパターンだろうと予想する。

とにかく、この鳥かごに乗ってはいけない。

「そんな罨が!？」

「ええ、ここまで近づかなければ罨と見破る事ができなかったですからね……危ないところだった。そうなる、罨ではない本当のゴールはどこに……」

最後の最後にこういう罨を持つてくるとは……やっぱり「ワンモア」は「ワンモア」だな。さて、そうなる、周囲に何らかの隠し要素があるはずだな。

そうして五分ぐらい周囲を調べてみると、罨ではない隠し扉を発見した。ただし床に。扉というよりはハッチと表現すべきだろう。

「こんなところに……」

「ガツチリとした隠蔽いんぺいでしたが、何とか見破れました。罨の反応はありませんし、おそらく本当のゴールはこの先です」

ハッチから降りた先には、やはり通路が続いていた。大量の罨というおまけ付きで。

そうそう、そうだよ。「ワンモア」がそんな優しい訳がないよな。こういう鬼畜な事をサラッとやってこそだ。

幸い崩壊まであと数分ほどの猶予ゆうよはある。ここまで来るのに時間はかかっていないからな。